

武蔵境新公共施設設計プロポーザル総括

武蔵境新公共施設設計者選考委員会
委員長 中川 武

本プロポーザルの特徴

今回の武蔵境新公共施設設計プロポーザルの特徴は次の5点であった。

- (1) 図書館を中心としつつも、複数の機能が相乗効果を産み出す「知的創造拠点」という新しい施設の方向を明快に問いかけたこと。
- (2) JR中央線の駅前という高いポテンシャルを持つ敷地でありながら、緑豊かな並木道や寺院と隣接し、公園と一体化して利用することが期待されるという魅力的な敷地であり、これを生かす方法が求められたこと。
- (3) 武蔵野市はこれまで、公共施設の建設に対して意欲的な試みを行ってきたが、今回の施設に対してはとりわけその思いが強く、市民、有識者グループ、行政の長年の熱い期待が込められたものであること。
- (4) 3次選考を経て選ばれる設計者と市民、行政が一体となり、時間をかけ、基本的コンセプトづくりも含めて、共に創るという姿勢を鮮明に打ち出したこと。
- (5) 公募型のプロポーザルであるが、ある程度実績を重んじたこと、また、要求が明快であるが回答はなかなか難しいものであったこと。

総評

提出された提案数は202点。この数は課題の困難さを考慮すると多いといえるが、課題のおもしろさを考えると、意外と少ないともいえるかもしれない。ともあれ選考委員一同全ての提案を読み込む作業が最も大変であった。公募方式によるプロポーザルの場合、参加することに意義ありとするものもかなりあるが、今回は実績を応募条件にしたこともあり、全てが力が入った提案であったといっても過言ではない。このことが、選考プロセスに対して、最後まで決定的な影響力を持つこととなったように思われる。というのは、文章表現による提案は差をつけ難いということもあるが、高いレベルの提案が200も並ぶと、選考委員は自分の評価の基準を相当明確にしないと、選び出すことは難しい。これは、当然のことであるが、今回は、各選考委員の評価軸は各々はっきりしており、他の選考委員から余り影響を受けないが、かといって、選考委員各々が全く違う提案者を選出の候補に挙げていたかという決してそうではなく、ある程度集中もしたのである。つまり、各選考委員にとって、1位ないし2位は圧倒的な重みを持ち、後は一般的な評価を許容するというように働いたとしか考えられない結果になったように思う。

通常、コンペやプロポーザルの結果は選考方法によって影響されることが多い。本プロポーザルでは2次、3次選考が公開選考を前提としたこともあり、その都度選考委員が選考方法を公開で協議して決めてきたが、むしろ選考方法よりも、202者の提案書の約8

割ほどが同一の高い水準にあり、そのことに選考委員がどう対応したかの結果が、1次選考の11者及び2次選考の5者の選考において微差の争いになった理由のように思われる。勿論、まぎれもなく21世紀の主要な課題となるであろう知的創造というテーマと住民サービスの提供がどのように両立しあうのか、郊外でも都心でもない地域のポテンシャルとは何かといったことは、重要かつ魅力的な課題ではあるにしても、そのコンセプト的な解決の方向はそれほど容易に示せるとも思えない。このことから必然的な結果であったかもしれない。これが設計案の選考と大いに異なる今回のプロポーザルの特異点であった。

内容的には、武蔵野市という具体的な場所における知的創造という課題を国際的な広がりの中で考える考え方や、図書館の新しいシステム技術への高い関心とともに、環境の中での佇まいや、どのような空間で本を読みたいかといった、空間への配慮が行き届いている提案が多かったことが印象に残っている。先に高いレベルの提案が多かったと述べたのはこのことである。

各提案の寸評

(1)(川原田案)

武蔵野というイメージに視点をおき、建築そのものを原っぱとして捉えた案。この傾向の案はいくつかあったが、最も徹底した案であった。ポテンシャルの高いこの場所だからこそ可能な案として、武蔵野市のシンボリックなイメージの発信基地となり得る。

(2)(伊東案)

提案者の設計体験の集大成として、この場所に図書館の拡大としての知的創造センターを設置するという主張は説得力を持つが、提案者の主張を実現する場として、果たして本プロポーザルがふさわしいのかという疑問が残る。

(3)(佐藤案)

複層的施設の統合の仕方や住民参加による自由な提案など複雑で有機的な空間決定要素がそのまま構造と空間システムを決定するという極めて、新しくかつ魅力的な建築コンセプトの提案である。ただ、最大の魅力である構造システムが、時間的変化にとって足かせになるのではという疑問がぬぐえない。

(4)(福田案)

全ての課題に対して高い水準で回答を出している。特に各施設、各場所の連結の仕方が巧みである。しかし、欠点の無さが必ずしも長所になっていないところが惜しまれる。

(5)(古谷案)

大きな構造と小さな構造という枠組の中に、多様な機能、場所、場面を巧みに配置し、都市の中の「木漏れ日」のようなビスタにより、繋がりを実現する案であるが、提案の骨子が強すぎるという印象を与える。